

伊東一夫著

文学への道

体験から表現へ

教育出版センター

＜著者略歴＞

伊東 一夫(いとう かずお)

1914年 長野県生

1940年 東洋大学文学部卒

現在 東洋大学文学部教授 文学博士

専攻 近代文芸思潮史

主編著 「赤彦の人と芸術」(藝科書房),
「長野県各地域における気質の
相違の調査研究」(信濃教育研究
所),「近代日本文学思潮史」(桜
楓社),「島崎藤村研究」(明治
書院),「島崎藤村事典」(同),
「藤村書誌」(国書刊行会)

現住所 武蔵野市桜堤公園78-3

昭和四十九年十二月五月初版発行 ©

以文選書 8

文学への道——体験から表現へ——

著者 伊東 一夫

発行者 柴崎 芳夫

印刷所 長塚印刷所

発行所 佛教育出版センター

東京都豊島区北大塚三―二九―二

郵便番号 一七〇

電話 〇三(九一七)八九三〇

振替 東京一四六二二

検印省略

序

本書は世に言ふ文学概論であるが、著者は敢へてそのやうなこちたき名を避けて、「文学への道」と呼んでゐる。まことに名づけ得て妙なりと評したい。

文学への道は、たしかに遠い。著者が特に力を籠めて語り、従つてその大なる特色の一つともなつて居る宗教的考察に因^{ちなみ}ある譬を借るならば、本書は正に、文学の「奥の院」に到る道案内とでも称したらよからうか。

「奥の院」への道は、はるかに遠く、其処には坦々たる野路も有れば、崎嶇たる山路もある。然し、その孰れとして、独自の風致雅趣を具へざるはなく、その道を辿る巡礼は、心引かるゝがまゝに、此の花の色を愛で彼の草の香を懐しみつつ、おのづからにして、文学の醍醐味を会得するのである。而も、彼は、その故に、彼れ本来の使命を疎にする事なく、珍花奇草に接する毎に、その特殊なる趣の由りて来る所を究める事を忘れない。それは、その都度、これが本書の一特色たる著者

の発する懇切な評語に促がされるが故である。

本書の中軸を成すものが、文学成立の根本条件たる体験と表現との二大問題に関する考察である事は言ふ迄も無いが、その中には、伝統的文学論を以てしては説明不可能な新型の作品の出現にも触れるなど、重要課題の提起もある。著者はこのやうな至難の諸問題を淡々と語りながら、「奥の院」へと人を導く。

類書の多くが、整然たる外観を保つ事に執するの余、「文学は何処に在りや」の嘆声をせしめるのに反し、本書は、その豊富なる引例が古今東西、特に現代の日本文学から採られてゐるので、趣味豊かなる一種の文学史とも言ふべき観を呈して居る。

斯くて、本書を繙く人は読みゆくにつれ、知らず／＼、文学の「奥の院」にと導かれるであらう。

昭和四十九年九月

矢野峰人

目次

序.....矢野 峰人

一章 文学への理解を阻むもの.....1

二章 文学論書における文学の諸説.....3

三章 経験と体験.....13

(1) 科学的(生活的)経験.....13

(2) 文学的体験とは何か.....17

四章 文学的体験の構造.....21

(1) 倫(倫理的体験).....21

(2) 信(宗教的体験).....27

(3) 美(美的体験).....44

(4) 美的体験よりみる詩歌の文学性.....58

(5) 真(真実体験).....64

(6)	真実体験における現実探究の傾向	87
(7)	象徴的体験	96
(8)	文学における体験の一般的意味	106
	五章 表現の問題	108
(1)	表現と言葉	111
(2)	表現と古典文体	114
(3)	文学的表現における言語の限界とその超克	125
(4)	語感の創造	131
(5)	アレゴリー(比喩)的表現	136
(6)	音楽的表現	141
(7)	言葉の心理作用としてのイメージ(心象)	147
(8)	言葉による実在感の創造	154
	第六章 文学と人生	158
	参考文献	169
	索引	176

一章 文学への理解を阻むもの

文学とは何かという問に対して、容易に答えられなくなってきたことには、種々の理由をあげることができる。

おそらくその第一は、文学が歴史のなかで種々の発展を示し、形式・内容ともに著しく変化してきたことであろう。十八、九世紀の文学に対する考え方をもっていたのでは、もはや二十世紀の文学を説明することができなくなっているのが現状である。そして、二十世紀即ち現代文学が、文学のわくの中で捉えにくくなってきた根本の理由として、文学にかかわる人間の問題に焦点がおかれてきたことをあげなくてはならない。人間とは何かという人間の存在への問いかけがなされ、人間の実存に様々の解釈が与えられる限り、文学にも多くの解釈や考え方が生まれることは当然である。そのような傾向は、結果的にみれば、文学のみかたについて、思想の表現を重視する傾向を生み、文学を芸術とする観点を否定するようにさえたってしまったことである。

第二は、文学が言語表現において成立するという文学の根本条件を軽視するか、もしくは無視することにおいて文学を考えようとする、全く観念論的な文学観が行なわれていることも、文学の基本的理解を困難にする大きな理由であろう。

第三は、これはもともと文学それ自身のもつ宿命ともいえることからであるが、文学的なもの、文学的世界というものを、論理的にとりだして示すことは、非常に困難であるということである。

言語感覚の鋭い人、美意識の豊かな人でなければ、文学の世界を深く理解することは困難であるように、はなはだしい個人差が文学には要求されることも、文学の理解を妨げる根本的原因である。このことは、たとえば、現代日本では、小説がひろく大衆に読まれているから、文学は多くの人々に容易に理解されているのだという見解のもつ、素朴な誤まりからも指摘されるであらう。

以上とりあげた三点は、文学の理解を妨げる根本原因と考えられるものであるが、逆にみれば、このような点から説明してゆくと、文学の実体を捉える一つの道がそこに開かれるのではないであらうか。本書では、ここに観点をおき、文学が創造される原点としての体験と表現の領域に、もっぱら論述の中心を向け、文学の世界の成立を考えてみたいと思う。

一章 文学論書における文学の諸説

文学の意味については、「文学概説」「文芸学概説」「文学論」など多くの概説書に一応は説かれている。しかし、次に例示するように、それらの書に述べられた見解には、それぞれのみかたや考え方が述べられていて、一般的な共通の見解が捉えにくいのが普通である。そこでもっとも簡便な方法として考えられるのは、辞典によることである。

『大日本国語辞典』には、〈主として人類の感情を訴ふる作物の特称即ち詩歌小説の類〉とあり、「文芸」については〈美的現象を思想化せしめて表現する技芸即ち詩歌・文章・小説・絵画・劇・彫刻等の称〉とある。『広辞苑』には、〈Literature 情緒思想を想像の力を借り、言語または文字によって表現した芸術作品即ち詩歌・小説・物語・戯曲・評論・随筆など〉とあり、「文芸」については、〈Literature 文学〉とある。この定義だけをみても、前者が、〈感情を訴ふる作物〉とするのに対して、後者は、〈情緒思想を……表現した芸術作品〉というように、説明が詳しくなっているだけでなく、〈想像の力〉とか〈芸術作品〉というような説明がはいっているのである。

このように、説明上の差異も文学の理解を難しくさせる一つの原因ではあるが、わかったように思われながら、少したちいって考えてみると、実はわかっていないという文学の捉えにくさを、加藤周一氏は次のように巧みに語っている。

文学とは何かといふ抽象的な問ひに答へることのできない場合にも、われわれは、何が文学であり何が文学でないかといふ具体的な問ひには、ある程度まで答へることができます。たとへば、陶淵明の詩集や谷崎潤一郎氏の小説『細雪』は文学であり、新聞の社説や六法全書は文学でないといふでせう。文学といふ言葉は、定義されたいにしても、一定の通念によつて支へられてゐます。しかし、あらゆる通念は厳密な批判に堪へないので、文学といふ言葉をきけば、誰でもわかつたやうな気がしますが、実はたしかなこととは何もわかつてゐません。すこし綿密な反省を加へると、文学とはわけのわからぬものだといふことになつてしまひます。現に小説家でさへも——小説家は一種の文学者でせうが——文学の鬼とか、文学的魂とか、かなり漠然としたことを主張し、主張の内容についてもうすこしくはしくうかがひをたててみると、何が文学だかわからぬところに文学の妙諦があるなどといひだします。文学とは、言葉であらはせない以心伝心のものだといふ。それにしても、文学者とは言葉で何かをあらはすことを職業とする人間ですから、その人間が言葉であらはせないといひだすやうでは、全く心細いかぎりです。とにかく、戦艦大和の沈むときの様子を生き残つた人の書きあげた記録文学といふものがあり、一方、おなじことを書いた新聞記事、——検閲のために無論新聞には書かれませんでした、——仮に書かれたとしても文学とはよばれないものがあります。記録文学は、煽情的な文句で飾りたてられてゐるところが新聞記事とちがふかも知れませんが、同じ煽情的な文句は、浪花節の特徴でもあります、しかも浪花節は文学と考へられてゐません。かういふ区別は、仮に区別があるとしての話ですが、少くとも文学の通念から直接にはでてこない。通念だけで万事が片づくといふわけにはゆかないので、通念そのものがあやふやなしるものです。

『文学とは何か』

たしかにここに指摘されているように、通念による文学への理解ということが一般的であることは、否定すべくもない。そして、通念がしばしば常識的な理解にとどまる限り、文学の本質は、ますます捉えにくくなるのである。

多くの文学論書は、この捉えにくい文学について、〈文学とは何か〉の主題を中心に、それぞれの見解を述べたものである。明治以後の、主として日本の学者による見解のうち、特色あるものを次にあげ、論評を加えてみよう。

文学とは人生に属する諸現象の研究なり。要するに哲学は考察を重んじて分析的に是を研究し、詩は想像を崇びて会意的に研究せし果を形像の上に表現せしものなり。換言すれば哲学は現象の推理を為して識得せしめ、詩は現象の描画を為して感得せしむ。其為す処同じからずと雖も二者の逍遙する世界及び目的は同一にして之を総称して文学と云ふ。(内田不知庵『文学一班』)

不知庵の『文学一班』は、明治二十五年の刊行になる書で、体系的な文学論としては、日本では古いものの一つである。文学を、哲学と詩を綜合したものと広義に解し、人生の研究であるとなしたところに独特の見解を示している。同様な立場は、〈文学は人間と無限とを研究する一種の事業なり〉(『精神の自由』)という、同時代に活動した先覚者北村透谷にもみられるところである。透谷は、

文芸は思想と美術とを包含したる者にして、思想ありとも美術なくんば既に文芸にあらず、美術ありとも思想なくんば既に文芸にあらず、華文妙辭のみにては文芸の上乗に達し難く、左りとて思想のみにしては決して文芸といふこと能はざるなり。〔内部生命論〕

と、文学に対する考えを述べている。文学が美と思想をあわせもつという考え方は、文学論における根本問題として、透谷によつてもすでに指摘されながら、現代にまでおよんでいるのである。

ローチファウコールド氏曾て曰く、文学の大洋には限界なし、と、これ文学なるものに対して、下したる漠然たる見地、未だ以て定義となすに足らず、然れどもこの一言はよく『文学』そのものを看破したる明言なりと謂つ可し。実に文学の語は漠々としてその真意義を知るに難く、古来その定義一定せることなし。或る者は、文学とは、人の思想を書き綴りたるもの也、といひ、或る者は、記録の総てを指す、といひ、或る者は善美の思想を法式の美麗に因りて書き現はすもの也、といひ、その所説殆んど一定せず、(略)今吾人は多く言ふを要せず、最後の断案として、文学に対する定義を下さん。曰はく、文学とは真、善、美の思想を美麗なる法式に因りて、書記する者也。(江藤専三『文学攻究法』)

これも明治中期に刊行された文学論書であるが、真善美の思想を美しい形式によつて表現するものを文学とする見解は、洋の東西を問わず、文学の基本的原則的なもので、辞典類の解説も、おおむねこの考え方によつてゐることは明らかである。

明治三十九年に太田善男編著の『文学概論』が刊行されているが、このなかに、パンコースト (Parcoast) の著に成る『英吉利文学史』から、文学の解説を編者が引用している。編者もこの見解が穩当であることを認めて、本書で主旨を敷衍して説明したようである。次にパンコーストの見解を同書からとりあげてみよう。

第二の制限ある意味にては、文学は、特殊なる述作の一種なりと云ふを得べし、されど其の特質は、之を表示し得ざるに非ざるも、嚴格に定義を下すことは困難なり。此の狹義の解釈に従へば、文学的作物は、教ふると云はんよりは、寧ろ思想感情或は想像を醒ましめ、娛ましめんとする目的を有せり。文学は或る階級の読者を標的とするものにあらざして、一般に読まれんことを望まざる可からず。文学はまた表現の技巧を要す、これ蓋し文学をして美術的作品の列に加へしむる要素なればなり。絵画や、音楽や、彫刻やの如く、文学もまた感情の描写を旨となす、故に此の点に於いて、文学は他の事柄を教ふるを以て主要目的とする知識、科学の書とは異なるなり。されども最も嚴格なる意義の文学は、尚ほ科学や、歴史の事柄にも関係せり、只だその之を用ふるに当りて、感情を動かし、想像を娛ましむる底のものを選ぶ要あり。文学は偏局せる特殊の知識を排して、一般の趣味性に訴へ、以て永遠不易の美と価値とを發揮すべし。

パンコーストの文学についての説明は、非常に一般的包括的で平明である。彼は文学を、文学がもつ独自の性格を通して説いている。要点をあげれば、文学は教化ではなく娛樂を目的とする、文

文学は広い読者に理解されることを求めている、文学は他の芸術と同じく表現上の技巧を必要とする、文学は感情の描写を旨とする、文学は永遠の美を創造する——などである。

次にあげるのは大正期の文学論である。

文学は情緒に訴へ情緒を動かすを以て主要眼目とするが、純粹に情緒にのみ訴ふる事は文学では不満足でもあり又不可能でもある。音楽は単に音の旋律に由て純粹に情緒に訴ふる事が能きるが、ポーの詩がいかに音楽の効果をのみ狙つたものにしても、到底全く思想を排除することとは不可能である。そこに理智の分子、思想の分子がなくてはならぬ。雷^{ただ}になくてならぬだけでなく、其思想がより深くより高くあればある程、文学の価値は深く且つ高いといはねばならぬ。(横山有策『文学概論』)

この横山氏の見解は、文学の成立要素を情緒(感情)と思想におき、特に文学の価値評価を思想の高さ深さにおいている点が注意される。

次に昭和期の諸説をあげてみたい。

文学は言語による体験の美的表現なり。(体験とは、直接的と間接的とを問はず、作者の人格に影響し、その血肉となつたやうな経験)(成瀬無極『文学』)

文学は作者の「想像」「感情」を通して読者の想像感情に訴へるといふこと、従つて読者を

動かすといふことが第一の条件、第二の条件としては、専門的形式でなく、一般の人に容易に解り易いことが必要、それからそれを読む者に美的満足といふ快楽を与へることが第三の条件である。（本間久雄『文学概論』）

文学に対し如何なる定義が与えられようと、それにかかわりなく、これについて言い得る唯一の事は、それが人生の芸術的表現だという事である。ここに「人生」と言ったのは、単に人間の生活とか世界とかに限らず「自然」をも含めたもので、われわれの一切の体験または意識内容を意味する。（矢野峰人『新・文学概論』）

文学は主として文字にて書かれうる言語を表現手段として、主として情緒の方向をとほして伝達される表象を内容とする芸術である。（大和資雄『文学概論』）

文学を、人間によって創造された美の、言語（文学）形式による表現といふ風に定義づけられ（山元都星雄『文学概論』）

文芸とは人間の意識の言語による美的表出である。（石山徹郎『文芸学概説』）

これらの戦前にみられる見解に共通する考え方は、美の表現、または言語による感情や思想の美的表現に、文学の独自性をみとめようとするものであった。これは少なくとも文学に対する原則論

として理解し得る共通の立場である。

次に、戦後の新しい文学観を二つとりあげてみよう。

文学とは、世界とわれわれとの関係を限定するものです。その限定の仕方は、美学的であると共に、また倫理的なものであつて、文学は一方で美に係ると共に、眞実、殊に人間的眞実に係つてゐます。従つて、われわれにとって文学が何であるかといふことは、われわれにとって美が何であり、人間が何であるかといふいはば文学以前の問題からきりはなしては考へられませんが、具体的にいひなほせば、われわれにとって、何が美しいかといふこと、また、何が人間的であるかといふことを前提としてのみ、何がわれわれの文学であるかといふことも正しく問題とされるはずです。（加藤周一『文学とは何か』）

美とは何か、人間とは何かという文学成立以前の問題に問いかけるところから文学が考えられているが、帰するところは、人間とのかかわりに文学の原点を求めているのである。現代人の考え方を代表するものであらう。同様に現代の作家森敦の見解の要点をあげてみよう。

私にとって文学とはなにか、とみずからに問うに先立つて、私がなぜ文学に戻つて来たかを語るのが、手早いものではあるまいか。私が文学に帰つて来たかを語ること、すなわち、私にとって文学とはなにか、という問いに答えることになるからである。（略）

私は君らより遙かに長い過去を持つている。ケルケゴールの反復ではないが、もしその過去